



## Contents

1	はじめに	1
1)	会費納入のお願い	1
2)	第13回大会案内	1
2	理事会・幹事会の報告	2
3	ELR2008福岡ポスター賞選定結果	2
4	行事開催報告	4
1)	第7回北陸現地WS in 能登	4
2)	第6回東北現地WS in 弘前	7
5	海外学会派遣報告	9
1)	Third Interagency Conference on Research in the Watershed (ICIW)	9
2)	EMECS-8 International Conference	10
6	編集後記: 事務局から	12

### 1 はじめに

今年の第13回大会は3年ぶりに関東圏であるさいたま市で開催されます。関係機関・会員数が多いという強みを活かして、活発で有益な大会にしたいとの意気に燃えて、実行委員会がスタートしました。また、併せて開催する第13回総会において、第12回総会で承認された規約改正に基づく手続きを経て、役員改選が行われます。

学会および会員各位が、さらに発展し、社会貢献を行うため学会運営へのご協力をお願いいたします。

#### 1) 平成21年度会費納入のお願い

##### (1) 正会員・学生会員の皆様へ

皆様に次年度分の会費納入をお願いする時期

がまいりました。同封の「会費納入のお願い」に記載した請求金額をご納入願います。

学生から社会人になる方はその分を変更してご納入くださいますようお願いいたします。

また、送付先、所属・勤務先の変更は決まり次第FAX、メールや連絡フォーム(ホームページに掲載)にてご連絡をお願いします。

#### (2) 英文誌購読の会員の方へ

国際共同英文誌 LEE (Landscape and Ecological Engineering) の年間購読料は、正会員7,350円、学生会員4,200円です。

購読を始めようという方は、当学会ホームページの購読申込フォームをご利用ください。

#### 2) 第13回大会案内

平成21年度の第13回大会の概要が決まりましたのでお知らせいたします。自由集会や特定セッションを予定しており、積極的に企画を募集させていただきますので一般発表とあわせて、ご準備をお願いします。

##### (1) 期 日

平成21年9月25日(金)～9月28日(月)

##### (2) 会 場

埼玉会館 (JR浦和駅西口から徒歩6分)

##### (3) 大会プログラム(案)

9/25 (金) : 第1日目

研究発表(ポスター), 自由集会

9/26 (土) : 第2日目

研究発表(口頭), 公開シンポジウム, 総会, 懇親会

9/27 (日) : 第3日目

研究発表(口頭), 特定セッション, 自由集会

9/28 (月) : 第4日目

エクスカージョン

## 2 理事会・幹事会の報告

第36回幹事会と第44回理事会は応用生態工学会会議室において平成20年12月9日(火)の午前と午後で開催されました。第44回理事会での報告及び検討内容を主体にして以下に報告します。

### 第36回幹事会出席者(敬称略)

江崎, 熊野, 浅見, 内田, 風間, 清水, 高野,  
西, 山本 事務局: 奥村(記録)

### 第44回理事会出席者(敬称略)

山岸, 近藤, 森下, 竹村, 中村, 古川, 間宮,  
山本, 江崎幹事長  
事務局: 奥村, 浅見(記録)

### <議事内容>

#### 1) 報告事項

##### (1) 平成20年度事業活動中間報告

一般経過報告, 会員状況報告, 幹事会報告と併せて資料内容が確認された。

##### (2) ELR2008 福岡の報告

有意義であった。数年に1回希望する。などのアンケートがあり好評であった。

次回は緑化工学会主体で開催したいとの申出に対しては, 平成23年以降の開催を条件として, 計画・運営を委ねる旨伝えることとなった。

##### (3) 平成21年度地域行事

広島, 福井でのワークショップが準備されていること, 札幌セミナーや東京勉強会(約2ヶ月毎)が定例化していることが確認された。

#### 2) 検討事項

##### (1) IGLIEE および COP10

①ICLEEの規約改定(学会長, 事務局が現状にあるように変更)は了承された。

②LEEの状況報告(中村理事より報告)

・2011年の発行でインパクトファクターが決まるが, 2008年, 2009年の引用回数が重

要となる。引用回数の増加を意図して, 発行月を2月, 8月に変更する。

・LEEは, Webで会員番号をもちいて管理し, 査読を行うことにした。

③COP10にあわせたURBIOは, 景観生態学会, 緑化工学会, 名古屋市が開催したい意向であると認識した。

当学会の関わり方については, 辻本副会長と江崎幹事長が検討することとなった。

##### (2) 第13回大会

大会開催概要と河川整備基金申請の状況を報告した。実行委員の協力依頼は, 依頼内容を明確にしてお願ひすべきとの指摘あり。

##### (3) 各委員会内規

各種委員会の内規作成は賛成多数。内規があるほうが動きやすいとの意見があった。

規約等において, 委員長指名や委員選出の方法を幹事会で検討し, 次回, 理事会に修正案を諮ることとなった。関連する委員会の統廃合等について, 「将来構想委員会」で協議することとした。

##### (4) 次期役員募集・推薦委員会

第12回総会で承認された「規約の改正」を受けて, 幹事を除く次期役員の選出を円滑に行うために設置する本委員会の規程案が提出された。本規程は3月の第45回理事会において決定される予定である。

## 3 ELR2008 福岡 ポスター賞の選定結果

応用生態工学会

●P1-6-5 河床底質の違いによる繁殖期トウヨシノボリ♂の産卵床選択に与える影響

○奥田千賀子(名大・工), 小野田幸生(京大・生態研) (○は発表者, 以下同様)

◎選定委員コメント「トウヨシノボリが必要とする河床環境をていねいに明らかにしていく過程が, とてもわかりやすく示されていました。どんな河

床であるべきか、河川技術者に提案できる成果をこれからもどんどん出していくことを期待しています」

(受賞者コメントは連絡不調で記事にできませんでした)

●P1-7-42 栄養塩フラックスの生態的コントロールによる富栄養化防止対策

○井芹寧(西日本技術開発)

◎選定委員コメント「コンサルタントの発表であり、最近の知見ではなく、また研究的でもないかもしれないが、アオコの抑制方法として生態系の力をうまく利用して無理のない方法を実現しており、高く評価できる。ポスターのデザインやわかりやすさも良い。」

◎受賞者コメント：「本研究は、長年の富栄養化対策の研究において、多くのエネルギー及び多額の費用を要する工学的手法の限界を感じ始めたところからスタートした。基本に立ち戻り、Microcystis (アオコ)の増殖機構を整理し、水域生態系における位置付けを再理解した。その結果、アオコは競合藻類にない増殖優位特性を有することが明かになった。この特性をピンポイントで操作し、さらに、逆手に取り制御に利用する方法がアオコ増殖制御につながることに気付いた。本手法は決してアオコを除去する手法ではなく、一般藻類の増殖を促すとともに水域の生態機能を活性化し、多様な生物相を創出する応用生態工学的手法である。今後は、再生した生態系によるアオコの増殖抑制効果を定量化していきたい。最後に、本研究にご助力をいただいた技術者の皆様、自然の仕組みの見識を広げ、多くの人々に出会う機会を与えてくれた応用生態工学会に感謝したい。」

●P2-6-19 マイクロサテライトマーカーを用いた塩生植物の遺伝的多様性評価：(2)宍道湖・中海におけるオオクグ(*Carex rugulosa*)個体群

○大林夏湖・程木義邦・國井秀伸(島根大・汽水域研究セ)

◎選定委員コメント「希少種の局所個体群について、遺伝的多様性の流域内分布様式を示し、保全上重要な地点の選定や特に劣化した地点の特定に成功している。研究目的、手法、得られた結果、それらの解釈が簡潔に記されている。」

◎受賞者コメント：「突然の受賞の知らせに驚きましたがポスター賞をいただき望外の喜びです。マイクロサテライトマーカーを使用した絶滅危惧種の保全に関する研究では初めての学会発表となりましたが、今後の研究の方向性を含め背中を後押ししていただいたと感じております。これからもこの手法を用いて、絶滅危惧種の遺伝的多様性とその保全に関する研究に邁進できればと考えております。末筆ながら、貴学会のますますのご発展をお祈り申し上げます。」

●P2-7-12 河川改修に伴う魚類群集とその生息場の時空間変動 —リバー・ランドスケープ・ユニットに着目して—

○永山滋也, 中村太士(北大院・農)

◎選定委員コメント「魚類の微生息場所特性について、本研究で得られた結果・結論は、一般的に考えられていることと違いはないが、それをきっちり定量的に評価している点が強く印象に残った。ポスターの内容について、詳しくすぎず、また簡潔すぎずと適度なレベルを保っていた点も評価できる。」

◎受賞者コメント「初の3学会合同という記念すべき大会においてポスター賞をいただき、大変光栄であります。発表致しました研究成果が、今後の河川整備・管理の一助となるよう、より成果を洗練し、ペーパーとしての公表へと進めていく所存です。コメントをいただいた皆様、ありがとうございました。また、私事ではございますが、この9月に博士論文が正式に受理されました。ポスターでは、その内容の一部を発表させていただきました。」

## 4 行事開催報告

### 1) 第6回北陸現地ワークショップ in 能登

応用生態工学会金沢 澤康雄  
(株国土開発センター)

平成20年10月30日(木)~31日(金)の2日間にわたり「能登の風土 ~日本の原風景を守ろう~」と題して開催し、ワークショップ158名、現地見学会40名のご参加を頂き、無事成功裡に終えることができました。

能登半島は、東・北・西を日本海に囲まれ、厳しくも豊かな自然に恵まれ、ここに暮らす人々は“能登は優しや土までも”と言われるほど人情味にあふれています。

しかし、能登では急激な過疎化が進み、これに追い打ちをかけるように平成19年3月に能登半島地震が襲い、今は能登全体が大いに疲弊しています。このような中、応用生態工学会では、能登の振興を少しでも応援したいという思いで、奥能登の輪島市、珠洲市、能登町、穴水町において、今回、ワークショップおよび現地見学会を開催致しました。

#### (1) ワークショップ

ワークショップは10月30日(木)に開催され、県内外から158人の参加を頂きました。

ワークショップは、実行委員長の金沢学院大学大学院玉井信行教授の開会の挨拶に始まり、能登町持木一茂町長の歓迎の挨拶を頂きました。

#### 1) 「能登の川」

(常田功二：石川県土木部河川課長)

能登半島の主な4河川は、いずれの河川も大きな水害が発生しており治水対策が重要であるが、自然環境等に配慮した川づくりに心がけていること、小又川では桜並木の散策路や既設石積護岸の川辺景観を保全・再生を行うなど、河川環境、自然環境、社会環境等について興味深い説明を頂きました。

#### 2) 「水田ビオトープづくりから見た里山保全」

(加藤秀夫：珠洲市立西部小学校長)

能登にトキとコウノトリが定着することを目指した休耕田でのビオトープづくりを紹介頂きました。湛水面積の拡大に伴いゲンゴロウ類、カエル類など、様々な生き物が殖えたこと、水管理や草刈りを協力するボランティアの減少など、様々な課題があること、地元の雇用・活性化につながる里山活動が重要であることを話して頂きました。

#### 3) 「道路整備と生物環境保全の取り組み」

(寺崎茂：国土交通省金沢河川国道事務所)

能越自動車道穴水道路における希少生物の保全のため、橋を3径間から2径間に設計変更したことや工事での配慮、供用後のモニタリング調査といった具体的な内容を紹介して頂きました。

#### 4) 「現状の森林と林業の問題点&おいしい魚を育てる森づくり」

(谷内與三郎：のと森林組合参事)

おいしい魚は、豊かな森林を保全することによって生まれる、という理念の下で「森を育てて豊かな海を守る」という育成会による高校生への環境教育や、地域住民みんなで共存共栄できる「能登半島」を目指す活動について話をされました。

#### 5) 「基調講演：能登の原風景と観光」

(藤平朝雄：能登半島広域観光協会相談役)

能登地方の原風景と古人との関わり、また、観光資源としての活用について紹介して頂きました。能登地方では日本海から吹き付ける強い潮風から家を守るために昔からメダケを用いた垣根(間垣)が利用されていることや千里浜は昔から馬が通る道として利用されていたことなど、とても興味深い講演をして頂きました。



基調講演をされる藤平朝雄氏

#### 6) 「環境配慮による能登半島再生：トキを呼びもどす意味」

(宇野文夫：金沢大学地域連携コーディネーター)

「能登半島里山里海自然学校」、環境保全型農業を实践する「里山マイスター養成プロジェクト」を紹介され、若者たちのビジネスチャンスへの挑戦を熱く語って頂きました。また、今年5月に能登へ飛来したコウノトリの食性、移動距離、風速との関係等を報告されました。最後に佐渡で放鳥されたトキは、これまでの飛翔実績等から、能登へも飛来する可能性について述べられました。

#### 7) 「赤とんぼから原風景を考える」

(上田哲行：石川県立大学教授)

『赤とんぼ』という言葉は『虫』ではなく記憶にある『風景』としてとらえ、原風景は人々の記憶の中にあるものという視点で、能登を日本の原風景とみなすことの意味について説明されました。そして、『原風景生成の場』と言う観点から地域振興を行うことの重要性について提案されました。

#### 8) 「北陸のトゲウオと水環境の変遷」

(森誠一：岐阜経済大学教授)

特徴的で多様な生物相を保持している湧水域を含む淡水域では、現在、その生息環境が悪化している現状を報告されました。これらの保全管理を進めるためには地域環境の特性を明確にすること、また地域の人々の「生き物の多様性」に関する認

識を知り、人々の生活の中で「無意識の保全を意識化し、地域保全に活用する」ことを提案されました。

#### 9) 「能登の海の魚、川の魚」

(坂井恵一：のと海洋ふれあいセンター普及課長)

対馬海流や固有冷水を反映した日本海の魚、生活タイプが異なる川の魚について紹介頂きました。近年、堰堤の改良(エアバック式と魚道の併設)によりサケ、アユ等の通し回遊魚には好都合な環境が増える一方、中・下流域では河畔林が減少し、平瀬化が進行してギンブナやナマズは生息が多難であることを指摘されました。森・川・海が一体であることを念頭に圃場整備や河川改修に取り組む必要があることを述べられました。

#### 10) 総合討論「～能登の風土－日本の原風景を守ろう～」

(座長 玉井信行：金沢学院大学教授)

前半は質疑応答を行い、里山保全取り組みについてのアイデア、過疎化で手入れ不十分な観光資源が多い、能登で生活する者にとってはインフラの整備もまだまだ必要等、質疑、意見が活発に行われました。

後半は“のと宣言”の内容について、能登の振興・発展には欠かせない経済的基盤の向上を基本に能登の風土を守ることが大切、など会場からも意見をいただきながら、座長と基調講演の藤平氏との対談形式で討論を行い、“のと宣言”をまとめました。

#### 11) のと宣言

(実行委員長：玉井信行)

応用生態工学会第7回北陸現地ワークショップ in 能登では、山・川・海の豊かさ、それを守り育てる運動、自然環境と人間活動の総体としての能登の風土の特徴などについて、考察を深めることができました。このワークショップで得られた共通の認識を発信し、地域の在り方について風土や

応用生態工学から考える眼をより確かなものにするを願って、応用生態工学会第7回北陸現地ワークショップ“のと宣言”を以下のようにとりまとめ、玉井実行委員長の音頭の下、参加者全員によって以下の宣言を行いました。

応用生態工学会第7回北陸現地ワークショップ  
“のと宣言” — トキが空を舞う能登へ

その1. 能登における「いのちのつながり」を大切にし、「山・川・海」のつながりを守る。

その2. 能登の豊かな幸を活用し、地域の伝統・なりわいを継承・発展させる。

その3. 地域住民、産業界、学界、行政の知恵を結集して、潤いと安らぎに富む能登の風土を守る。



のと宣言対談風景

## 12) ポスターセッション

ワークショップ会場後方には、実行委員が持ち寄った10点以上のパネルの出展があり、昼食時や休憩時間などのワークショップの合間に様々な議論がなされていました。

## (2) 現地見学会

### 1) 北河内ダム、能登町五十里

ダム建設による希少種生息地への影響を軽減する代償措置や、現在の生息状況、生息環境を維持するための植生管理方法等について説明頂きました。



ポスターをめぐる討議

### 2) 粟津ビオトープ、珠洲市粟津

当該地域は、自然豊かな場所であり、「ため池」が多いという特徴があります。この地元の自然環境と触れ合いながら学ぶことができるビオトープについて紹介頂きました。粟津ビオトープは、地元小学校の生徒や住民の協力により整備された面積約5,000m<sup>2</sup>のビオトープであり、現在では、周辺のため池から移動してきたと考えられるゲンゴロウ類等の水生昆虫やヨシ、ガマ等の湿性植物が繁茂しており、豊かな水辺環境が創出されている様子を体感しました。



ビオトープ見学風景

### 3) 里山マイスター能登学舎、珠洲市小泊

能登学舎の校内を歩き、薪ストーブといった環境にやさしい設備、手作業で育てている菜園畑等を見学しました。また、珠洲市の泉谷市長から、能登半島の再活性化に向けた熱い思いをお話し頂

きました。当日は、地域の方々が地元産食材（“へんざいもん”と呼ぶそうです）のみで料理して下さったお食事を参加者全員でおいしく頂きました。



泉谷珠洲市長歓迎挨拶

#### 4) のと海洋ふれあいセンター

展示室では九十九湾に生息する様々な生き物を見学し、ヒトデなどの磯の生き物を手にとってふれあうことができました。マンリンシアターでは能登の海の自然、風土、歴史、地域の素晴らしさを立体映像で視聴し、能登の海への興味と理解が深まりました。

#### 謝辞

ワークショップ、現地見学会の開催にあたりご協力頂きました会員の皆様と後援者であります国土交通省北陸地方整備局、農林水産省北陸農政局、環境省中部地方環境事務所、石川県、輪島市、珠洲市、能登町、穴水町、(財)リバーフロント整備センター、石川県治水協会、北陸建設弘済会、北國新聞社に厚く御礼申し上げます。

#### 2) 東北現地ワークショップ in 弘前の報告

応用生態工学会仙台 橋本正志

2008(H20)年11月8日(土)~9日(日)に、第4回東北現地ワークショップとして「流域の自然再生を考える」を弘前大学(青森県弘前市)の農学

生命科学部で開催しました。今回は、日本生態学会東北地区会との共同開催となり、応用生態工学会41名、日本生態学会37名の合計78名の参加者がありました。

開会にあたり、弘前大学の東信行先生より、今回のテーマである“自然再生の事例”を通して、本来の自然を取り戻すことが、応用生態工学会と日本生態学会の会員共通の目標になり得るとの趣旨説明がありました。



ワークショップ1日目の会場

<<1日目>>

#### 1. 基調講演：「流域の自然再生を考える」

中村太士(北海道大学大学院農学研究科)

釧路湿原や知床での経験を通して、自然再生事業を推進していく上での難しさや、うまくいっている例を具体的な事例で説明していただきました。その中で、リファレンスサイトと乖離度の考え方や、景観生態学からみた景観ユニットと攪乱頻度の関係などは、大変参考となりました。

自然再生を考える際の重要点をまとめると、以下のとおりです。

- ・生息環境の広域評価を行い、地図化し、保護・再生の戦略を立てる必要がある。
- ・生物系を扱う場合、その生物の生活史(特に繁殖ステージ)が重要。
- ・攪乱をどの程度許容するか議論が重要。

## 2. 研究・事例発表

### (1) 「住民の記憶に基づいた木野部海岸の磯再生」

角本孝夫 (NPO 法人サティナブルコミュニティ総合研究所)

1999年から行われた青森県下北半島の木野部(キップ)海岸の整備にあたって、住民参加型の磯の再生事例を紹介していただいた。

ここでは、「暮らしの磯場を戻す」を基本テーマとして、

- ・昔ながらの自然の形を崩さない
- ・異様な構造物は持ち込まない
- ・昔の磯を再生する

の3つを軸として磯の再生に取り組み、その中で様々な工夫が紹介されました。

### (2) 「仏沼のこれまでと現状そして未来」

古川博 (NPO 法人おおせっからんど)、高橋雅雄 (立教大学大学院)

オオセッカの繁殖地と知られている、下北半島小川原湖の仏沼での保護管理の取り組みを報告していただきました。オオヨシキリの繁殖環境としての中層ヨシ原の重要性が明らかになり、地元が行っているヨシ原の火入れが繁殖成功率に大きな影響を及ぼしていることなどが報告されました。

### (3) 「青森のメダカ保全指向ビオトープ～メダカ郷和国とあずましの水辺」

工藤敦士 (弘前大学大学院)

道路事業によって造成された2箇所のメダカビオトープについて、管理状況や地域住民との係り方の違い、それによるメダカの生息数や環境の変化について、モニタリング結果とあわせて報告していただきました。

### (4) 「河川水生昆虫の遺伝的多様性からみた自然環境の保全と再生」

渡辺幸三 (東北大学大学院)

DNA多型の研究事例として、ヒゲナガカワトビケラの流域エコロジカル・ネットワークの評価

について、また、水生昆虫の分散能力とダム湖の大きさが群集間の遺伝的分断化に及ぼす影響について研究成果を報告していただきました。

DNA多型分析の特徴は以下のとおりまとめられます。

- ・流域内の移動分散の経路や範囲を明らかにできる。
- ・流域内で他支川から個体に移入しやすい、移入しにくい地域を明らかにできる。
- ・ダム等の人為的な生息地分断化に伴う遺伝的分断化の定量評価が可能。

### (5) 「蕪栗沼遊水地の湿地再生から10年」

香川裕之 (東北緑化環境保全 株式会社)

わが国有数のマガンの越冬地での自然再生の取り組みについて報告していただきました。

蕪栗沼では、2005年にラムサール条約の登録湿地に指定され、それに先立つ2000年に基本管理計画が策定されました。水田跡地の植生変化としては、エコトーンとなる水際にマコモやフトイが、水域にはミズアオイ群落やヒシ・アサザを中心とする浮葉植物群落が生育してきました。現在、マガンは5万羽(環境収容力?)がねぐらとして利用していますが、今後も継続的なモニタリングと自然再生効果の検証が必要です。

### (6) 「国指定浜頓別クッチャロ湖鳥獣保護区における保全事業に向けて」

田拓 (株式会社 地域環境計画)

ラムサール条約の登録湿地である北海道クッチャロ湖鳥獣保護区の保全事業について報告していただきました。

クッチャロ湖は昭和40年代からの農地拡大(湖面面積の減少)とともに、富栄養化による水質の悪化がみられます。また、植生遷移として乾燥化にともなうササ群落の拡大が進行しています。保全事業の具体的実施はこれからですが、これらの基礎資料をもとに有効な保全対策を行う必要があるとの報告がありました。



<<2日目>>

### 3. 現地見学会

翌日の現地見学会には19名が参加し、午前中は岩木川上流に建設中の津軽ダムでの環境保全の取り組み状況と、白神山地ビジターセンターで世界遺産について見学を行いました。



現地見学会参加者(白神山地ビジターセンター前)

午後からは青森市に移動し、前日のワークショップで報告のあったメダカビオトープ「メダカ郷和国」と「あずましの水辺」の2箇所を見学し、水路などの施設や管理状況の違いによる植生遷移の状況について、当時の設計技術者も交えて現地での検討を行いました。

今回のワークショップの開催では、日本生態学会東北地区会の方々と東北環境アセスメント協会の会員の方々に多大なご協力をいただき、盛会のうちに終了することができました。ここに厚く御礼申し上げます。



「あずましの水辺」での見学

なお、今回のワークショップ報告書(2,000円)をご希望の方は下記までお申し込みください。

#### 【報告書申し込み及び問い合わせ先】

●応用生態工学会仙台  
〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-7-25  
復建技術コンサルタント内(橋本正志)  
TEL: 022-217-2034  
E-mail: [masasih@sendai.fgc.co.jp](mailto:masasih@sendai.fgc.co.jp)

## 5 海外学会派遣報告

### 1) Third Interagency Conference on Research in the Watershed (ICIW) 参加報告

九州大学大学院工学府博士課程2年 林博徳

#### (1) 研究発表に対する、参加者

(訪問者)の意見や感想

私の研究内容に対しては、独創的で面白いといった内容の好意的な意見が多かった。また具体的な研究方法に対して、様々な提案が参加者から出されるなど、非常に有意義な議論を交わすことができた。私は再生氾濫原における植物再生過程について発表を行ったが、同様の分野で研究に取り組んでいる研究者の人脈も広がり、参加して得るものが多い学会発表であった。



図-1 私のポスターを閲覧する参加者たち

#### (2) 海外の最近の研究(技術)テーマや内容の

動向及び参加学会で実施された討論会について  
私が参加した学会では、Adaptive Management(順応的管理)に関する研究が非常に多くみられた。学会で行われた討論会も Adaptive Managementをテーマとして実施された。討論会

では, Adaptive Management circle (図-3) が主催者から提示されており, 話題提供者 (発表者) は自分の研究が図-3の中でどこに位置するかについて述べ, それについて参加者全員で議論をするという形式で行われた. 議論では, 研究を Adaptive Management に活かしていくために, 何が重要かということや, それぞれの研究の方向性をどうすべきかということが話し合われた. その結果, 市民との連携を深めることや地球温暖化をはじめとするグローバルな問題に対する視点をもち研究に取り組むことが重要であるという結論が得られた.



図-2 討論会様子

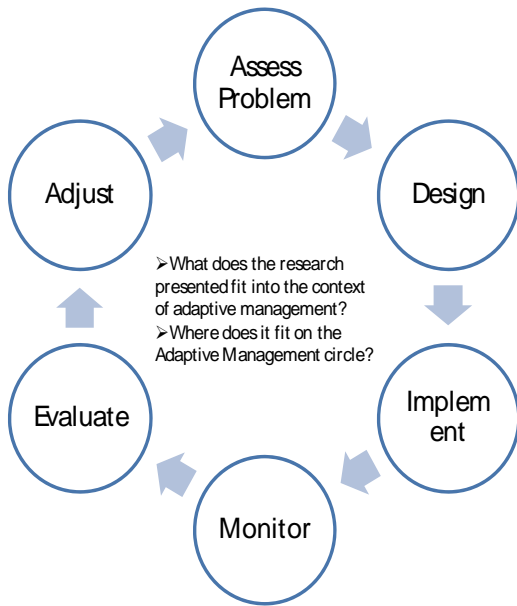


図-3 Adaptive management circle

### (3) 以上を踏まえた全体の感想

本学会は, 5 日間にわたって実施された. 会場が山間部のロッジだったこともあり, 学会開催期間中はずっと会場に泊まり込みで, 終日研究発表や議論をするというものであった. そのため, 非

常に密度の濃い時間を過ごすことができた. 海外研究者の発表内容を聞くことはもちろんであるが, 連日英語で様々な議論を交わすことが私にとっては非常に勉強になった. 自身の英語力向上の必要性を強く感じたのはもちろんであるが, 学会期間中は日本語を全く使わず (日本からの学会参加者は申請者のみだった), 発表や海外研究者と議論をすることができたことは, 私にとっては貴重な財産となった. また, 研究内容については, 海外における研究の動向や様々なアイデアを吸収することができたことが収穫であった. 今後は, 本学会で得た知見やアイデアを自身の研究に活かしていきたいと思う.

### (4) おわりに

本助成のおかげで非常に有意義な経験をさせていただきました. 心より感謝いたします.

## 2) EMECS-8 International Conference 参加報告

(財) 広島県環境保健協会 杉本憲司

このたび, 応用生態工学会の 2008 年度国際交流海外会議へ派遣事業の助成を受け, 第 8 回世界閉鎖性海域環境保全会議 (以下 EMECS8) へ参加してまいりましたのでここに報告いたします.

EMECS8 は, 生物多様性の確保, 子供たちへの環境学習など先導的な政策と共に国際協力を進める姿勢を表明し, 豊かな瀬戸内海作りに取り組んできた経験から閉鎖性海域の環境問題は上流から河口域までを含めたトータルなシステム, ローカルからグローバルまで複雑に絡み合ったシステムになっていることを指摘しています. そのような視点に立った分析や新しい協力関係, アプローチについて意見交換が行われ, 閉鎖性海域の環境問題に有益な議論が行われる場として, 2008 年 10 月 27 日から 30 日までの 4 日間, 中華人民共和国上海市の上海光大国際大酒店 (エバーブライトホテル) 等において, 約 470 名 (37 カ国) の参加を得て開催されました.



EMCS8の集合写真(EMECS8事務局提供)

### (1) EMECS8 会議

基調講演として蘇記蘭院士(中国国家海洋局)が、「浅海域にける生態地域の区分設定」として、漁業管理の手法は、漁獲禁猟期の規制よりも、浅海域の生態地域の区分設定を行う管理が重要であることを指摘されました。具体的には中国近海の浅海域での生態地域の区分設定の方法として、深度図、大川からの拡散、潮流、海域の色、栄養塩レベルの情報がさらに有効であると述べられました。

EMCS8の口頭・ポスター発表数は292であり、セッションは全部で8ありました。以下にセッションを示します。

**Session 1** ; Catchment-Coastal Environmental Vulnerability under Global Warming Setting

**Session 2** ; Policies to Address Ecological and Social Risks in an Integrated Coastal Management Framework

**Session 3** ; Large River Dialogs - Water Quality, Total Loads Controls and Management

**Session 4 (Regional Seas sessions)** ; Regional Seas - Total Loads Control

**Session 5 (LOICZ session)** ; Institutional models for Regional Collaboration in coastal Science and Management

**Session 6 (APN-IGCP475 special session)** ; Megadeltas Landform Changes and Coastal Hazards Assessment

**Session 7 (Sato-Umi session)** ; New Concept that Increases Biological Productivity and Biodiversity

**Session 8 (Student session)** ; Teaching and Learning about the Environment to Benefit People and Nature

EMECS8は、生態系修復や水質改善の研究発表だけでなく、教育現場、行政、市民から提言されるセッションがあることが特徴であり、技術や科学研究だけの国際会議とは違った特色があります。

私が口頭発表を行ったSession 7は「里海」セッションであり、瀬戸内海再生のキーワードとなっている「里海」の概念を世界に広げ、役立たせるためのセッションでした。私の口頭発表は「Restoration of eelgrass (*Zostera marina* L.) bed by filling up a borrow pit with natural sediment」で、周囲からの種子供給が期待できる浚渫跡地において、埋め戻しによるアマモ場の自然再生の可能性を検討するため、浚渫跡地の一部を埋め戻し、物理環境、アマモの生育状況等のモニタリングを行いました。その結果、浚渫跡地での埋め戻しが、自律的に回復するアマモ場再生に有効な手法であるという結論を発表しました。発表後に、1)自然を再生するために、窪地を埋め戻すことが最も有効的な手段であることなのか。2)中国では浅場の再生事業はほとんど行われていないこと。3)日本で数ヘクタールの再生事業を行っていることに対する疑問点。についてディスカッションをしました。中国の研究者からは、現地視察に行った崇明東灘湿地の面積を考えると、中国の広大な大陸、河川、湿地の規模対して日本で行っている生態系の再生事業規模はあまりに小さいと感じられたのではないかと思います。

### (2) 現地視察

10月30日に世界有数の野鳥飛来地として自然保護区に指定されている崇明島東部の崇明東灘湿地を視察しました。崇明島は世界最大の沖積島であり、東西約80km、南北約15kmの中国では海南島に次ぐ面積の島です。崇明島に行くために長江を渡りましたが、途中、周りに陸は見えなくなり、海の濁度も非常に高く日本にはない「大河」を体験することができました。崇明東灘湿地は、2002年にラムサール条約に登録され、面積は約1,083haです。今回は海岸や干潟の様子までは視

察をすることができませんでしたが、地平線の先まで広がる湿地を視察することができました。崇明東灘湿地は、私が今までに視察を行った湿地の中で最も規模が大きく、中国の広大さを改めて感じました。



崇明東灘湿地の様子

EMECS8 が開催された上海は中国一の大都市でしたが、遠くが霞み、川にはゴミが多く溜まっており、大気汚染や水質汚濁などの環境問題があるように感じました。それと同時にインフラ整備のために次々と生態系が破壊されているように感じました。上海にも崇明東灘湿地のように生態系の保全を行っている地域はありましたが、インフラ整備優先で生態系を修復もしくは創出するまでは至ってはいないと感じました。経済発展が著しく、生態系の保全について考える必要が出てきた上海だからこそ、EMECS8 が開かれる意義があったのではないかと思います。

最後に本学会を通じて国際会議への参加を支援していただきました学会員の皆様方、および学会期間中にお世話になりました関係者の方に厚く御礼申し上げます。

## 6 編集後記・事務局から

### <今後の予定>

立春も過ぎて日々太陽の光に力強さを感じる時候となり、慌しい年度末まで残すところわずかとなりましたが、今年も各地で活発に研究活動が計画されています。また、今年には役員改選(第6期から第7期)があります。

3月4日(水)

<後援予定行事>第4回淡水魚保全シンポジウム  
岡山大会(会場:岡山市立万富会館)

3月23日(月)第37回幹事会、第45回理事会

(財)ダム水源地環境整備センター第3会議室)

4月 第7回東京勉強会(日時・会場未定)  
リモートセンシング関連報告

5月 第8回東京勉強会(日時・会場未定)  
湧水保全関連報告

5月中旬

第38回幹事会、第46回理事会  
(第13回総会議事内容ほか)

第13回大会実行委員会(スケジュール・広報等)  
ニュースレター44号発行予定

(次期役員公募、大会発表・参加申込受付等)

6月 会誌「応用生態工学」第6巻1号発行予定  
8月

第13回大会実行委員会(プログラム・運営等)

ニュースレター45号(第13回大会案内等)予定  
8-9月

広島ワークショップ [予定]

札幌セミナー [予定]

9月20日(日)-23日(水)

<後援行事>国際甲殻類学会東京大会

発表&早割引参加申込締切4月末

(東京海洋大学)

9月25(金)-27日(月)

第13回大会及び総会

埼玉会館(さいたま市浦和区)ほか

10月30日(金)-31日(土) 福井市

第8回北陸現地ワークショップ in 福井

### <事務局の近況>

世界的に不景気の嵐が吹き荒んでいます。好景気という神風を期待したい所ですが、今度の不景気は神頼みでは収まる気配はありません。人間の知恵と努力によって克服するしかないと思います。事務局作業においてなしえる事は無駄を省くこと尽きると考え、ささやかながら「プリント前にミスチェック」「ちょっと待て、そのコピーは必要か」を唱えつつ努力しています。

平成18年10月から事務局長を努めさせていただいた奥村は3月末をもって交代いたします。後任は(株)建設技術研究所から出向して下さる“飯谷伏竜さん”です。この2年半、役員の方々の多大なご指導と会員各位のご支援をいただき感謝しております。残り1ヶ月、様々なことを思い出しつつ、次期事務局長に円滑に引き継げるよう気を引き締めて日々精励します。

(事務局:奥村興平)

\*\*\*\*\*

[平成21年2月20日現在会員数]

名誉会員: 3名

正会員: 1,095名

学生会員: 118名 合計 1,216名

賛助会員: 37法人(57口)